



高知県立
文学館

高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol. 41



▲1993年早春、二人の弟ベル・ウロフ(左) ラルス(右)とアトリエで (提供/講談社)

リレー随筆

トーベ・ヤンソンのルーツ——相楽

さがら たかこ
多賀子

一九四五年に世に出たムーミンの初版本『小さなトロールと大きな洪水』はスウェーデン語で書かれている。一九二七年に独立国となったフィンランドは、十字軍侵攻後約六五〇年もの間スウェーデンの、また一八〇九年以降百年余りはロシアの領地だった。「スウェーデンの田舎」フィンランドは、長くロシアとの国境争いにさらされた。ロシア領となっても、スウェーデン人貴族や僧侶の子孫は、議員や学者などの思想的支配層としてフィンランドに居住した。トーベはフィンランド独立以前の一九一四年、スウェーデン系フィンランド人の芸術一家に生まれた。

父は彫刻家、母は画家で、トーベの弟のベル・ウロフは写真家に、末の弟ラルスは、トーベを助けて一九五三年からイギリスの新聞にムーミンコミックスを共同執筆した。トーベ自身は、母シグネも挿し絵を描いていた政治風刺雑誌「ガラム」で十五才から挿し絵の仕事の始めた。フィンランドにおいては少数民族であるスウェーデン系の作家や学者たちが内外の独裁体制を批判する拠点だった雑誌「ガラム」。トーベは「ガラム」に五〇〇点を超える作品を発表した。

ムーミンパパとママそっくりな両親を中心としたトーベの家族は、個人の自由を尊重し互いに

の作品に干渉しなかったが、強い結びつきを持っていた。『小さなトロールと大きな洪水』は、ソ連・フィンランド戦争で出兵した弟ベル・ウロフが負傷し、画業を続けることが精神的に辛くなったトーベが救いを求めて創作した家族を探すムーミンの物語である。そして次作『ムーミン谷の彗星』では世界の終わりを乗り切る家族の姿が描かれ、三作目の『たのしいムーミン一家』では、個性的な住人たちの住む谷に訪れる春が描かれた。

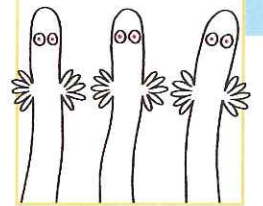
この作品は、フィンランド湾の小島に弟ラルスと共に建てた小屋で執筆された。(フィンランド周辺には八万もの離島がある!)トーベは、幼い頃多くの夏を祖父母の別荘など離島で過ごしていた。子供時代の自然豊かな島暮らしを思い出したトーベは戦争中感じた無力感から解放され、家族との大切な思い出を緻密な画家の筆で描きはじめた。当たり前だった家族との温かい日常や、苦々しい対人関係の失敗すらムーミン谷の住人たちによりデリケートに演じられ、読者はトーベという、自由のためには孤独も辞さない芸術家をムーミン童話のなかで追体験することになる。他人や自分の自由を忘れがちな私たちにとっては少し刺激の強い物語だ。

(株式会社川辺インターナショナル)
※ムーミンの日本における商品化権許諾契約窓口であり、公式サイトでの運営も行っている。

展覧会
紹介

ムーミンの世界展

「ヤンソンさんからの贈り物」



平成20年
7月19日(土)
▼
8月31日(日)
企画展示室
観覧料600円

高知県立文学館では、毎年夏休み

期間に親子で楽しめる企画展を開催

しています。今年は、トーベ・ヤンソ

ンの名作「ムーミン」シリーズを取り

上げ、パネルとジオラマなどの立体

的資料で楽しくご紹介します。

味わい深いムーミンの魅力

フィンランドの女性作家トーベ・ヤンソン

(一九二四―二〇〇二)によって生みだされた

「ムーミン」シリーズは、一九四五昭和二〇年

の誕生以来、全世界で出版され子どもから大

人まで愛され続けています。

日本ではアニメーションのイメージが強く、

「かわいいキャラクター」という印象が強い

ムーミンですが、原作を読むといろいろな顔

を持ち、実に味わい深い魅力が秘めていること

が分かります。子ども向けだと思われがちな

この物語の中には、随所にトーベ独特のあた

たかい視点で「生命への愛しみ」「孤独の楽し

み方」「自我の発見」などのテーマが盛り込

まれており、様々な困難や出来事に「自分らし

く」立ち向かうムーミンたちの姿に、私たち

は生きていくためのヒントをも感じ取ること

ができるのです。また、二〇〇八平成二〇年は

最初の「ムーミン」シリーズが発表されて六三

(むー・みん)年目を迎えます。語呂合わせで

はありますが、ムーミンにびつたりなこの時期に展覧会を開催することで、トーベ・ヤンソンが遺してくれた貴重な財産「ムーミン」シリーズの魅力に迫ります。

●第1部 フィンランド ってどんなところ？

トーベが三〇年あまりにわたって書いて

きたムーミン作品には、彼女の故郷である

北欧フィンランドの豊かな自然や暮らしの

様子が生き生きと描かれています。

モダンな建築や家具、またオーロラに代

表されるフィンランドは「北欧」というイメ

ージから「なんだか日本から遠い国」だと思

われがちですが、実はフィンランド航空の

直行便を利用すれば、9時間半で首都のヘル

シンキに到着する、私たちにとって一番近

いヨーロッパなのです。このように、普段は

なじみの少ないフィンランドの文化や四季の

写真をパネルなどで分かりやすく展示しま

す。北欧の雰囲気をお楽しみください。

▼トーベ・ヤンソンが1965年～1991年までの夏を過ごした通称ヤンソン島とトーベの小屋(提供/株式会社川辺インターナショナル)



●第2部 ムーミンが 生まれるまで

トーベは一九二四(大正三三年、八月九日

フィンランドのヘルシンキで彫刻家の

ピクトル・ヤンソンを父に、画家のシグネ・

ハンマルステンを母にして生まれました。

おりしも世は第一次世界大戦下で、戦争

が生活に陰鬱な影を落としますが、芸術

一家の家庭に育つたことでトーベ自身も

幼いころから絵を描き、様々な物語に親し

んでいきます。このような生い立ちから

ムーミン誕生までのエピソード・創作活動

のひろがりやをパネルとトーベ直筆書簡な

どの貴重な資料で楽しくご紹介いたします。



展覧会
紹介

ムーミンの世界展

「ヤンソンさんからの贈り物」

▶『小さなトロールと大きな洪水』初版本
(講談社 所蔵)

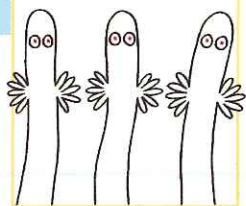


このコーナーでは、物語の1シーンを忠実に再現したジオラマ数点を中心に、フィンランドのムーミン谷博物館で発売されているポストターや、『小さなトロールと大きな洪水』初版本、個人所有のアラビア陶器、人形作家・谷口千代さんの作品十数点など、パネルを含め約一五〇点の資料を展示し「ムーミン」シリーズの魅力的な世界をご紹介します。ジオラマは、今回の企画展の大きな目玉でもあります。まず

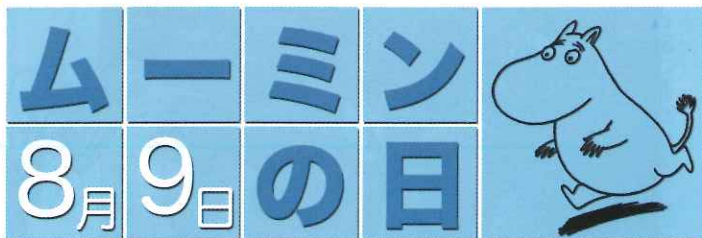
第3部 ムーミン谷の住人たち

一階受付にはトーベの自画像がおなじみの仲間達に囲まれながら観覧者のみなさまをお迎えし、会場に入るとムーミン一家が揃ってみなさまをお迎えします。また、光の演出ができる「メラメラマシーン」を使って冬のムーミン谷の情景を再現するなど、従来の企画展とはひとあじ違った内容で展覧会を盛り上げます。観覧された誰もが「ムーミン谷の一員」になれるこの展覧会にぜひ足をお運びになり、従来からのファンの方も、初めてムーミンに触れる方も時間を忘れてゆつくりとお楽しみください。

(学芸課/福富陽子)



平成20年
7月19日(土)
▼
8月31日(日)
企画展示室
観覧料600円



8月9日はムーミンの日!

高知県立文学館以外でも各地で様々な催しがあります。詳しくはこちらをご覧ください。
ムーミン公式サイト
<http://www.moomin.co.jp/>

◆ムーミンの世界展 関連企画のご案内◆

この他にも楽しいイベントを予定しています。詳しくはお気軽にお問い合わせください!

■ムーミン谷へようこそ!~ムーミンクイズ~

開催日:平成20年7月19日(土)~21日(月)、8月9日(土)~11日(月) ※開催期間中いつでも参加できます。
場 所:文学館2階 企画展示室
参加料:当日観覧券が必要です。(当日、会場に直接お越しください。)
※当日観覧者を対象とした楽しいクイズを開催いたします。正解数にあわせて賞品をプレゼント!

■親子で作ろう、ムーミンのポップアップカード!

開催日:平成20年7月27日(日)、8月3日(日) 各日とも午後1時~午後4時
場 所:文学館1階 文学館ホール
参加料:当日観覧券が必要です。(当日、会場に直接お越しください。)
※切る・折る・貼るの簡単な作業で楽しいカードを作ろう!

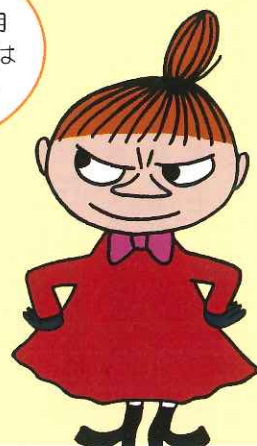
カッター・ハサミ・
熱を発する器具を使用
します。小さいお子様は
保護者同伴でお越し
ください。

■スナフキンの帽子を作ろう!~わくわく花かざり~

開催日:平成20年8月17日(日) ①午前10時~ ②午後1時半~ ③午後3時~
場 所:文学館1階 文学館ホール
定 員:各回35名 定員になり次第受付は終了します。
申 込:事前に電話による申し込みが必要です。また、参加には当日の観覧券が必要です。
※スナフキンのトレードマークは帽子♪スナフキンのように帽子に花をかざって遊ぼう!

☆展示解説

日時:毎週土曜日(平成20年7月19・26日、8月2・9・16・23・30日)と8月10・31日の日曜日
各日とも午後1時30分~(30分程度)
企画展担当者が展示解説を行います。(要観覧券)



文学散歩開催!

5月25日(日)まで開催しました「井伏鱒二と中・四国路」展関連企画として、井伏の生まれ故郷・広島県福山市を中心とした文学散歩ツアーを、5月18日(日)に行いました。約30名の参加者とともに、井伏文学を満喫する一日となりました。参加者のみなさんの声を紹介いたします。

私の生まれは福山、井伏鱒二の生まれも福山。『黒い雨』の主人公、閨閣重松の被爆地横川駅は、義父が、かつて駅長だったことなど特別の想いで文学散歩ツアーに参加した。

緑の山に囲まれた平和な村(旧三和町)はかつて被爆後に次々と起こる出来事に苦しんだ人達がいたことなどをすっぱりと包み込んで、今は静かなたたずまい、特に重松宅は立派な母屋と庭であった。(中略)



▲『黒い雨』が生まれるきっかけとなった重松邸にて

さまざまな関わりやいくらかの知識を持って参加することがいかに自分を楽しませてくれることか。文学散歩ツアーは文学館の展示、講演で知識を深めて参加出来るので大変良いと思う。

(H・Mさん)

文学散歩ツアー計画中は人が集まるかと思えば次は天気の心配でしたがいい日和で楽しい旅の一日でした。朝早い出発でしたが『黒い雨』の舞台である小島の志麻利という資料館で重松文宏さんから暖かい概要の説明を受け、ふれあい平和ロードと名付けられた道に出発しました。代官所跡では多くの古文書の分散を知り大変残念に思った事でした。井伏が重松静馬さんからの日記を大切に預かり『黒い雨』という作品が生まれた事をトツトツと語られる文宏さんの姿を見、平和という今に感謝する良い機会を作ってもらいました。

(山下多加子さん)



▲井伏鱒二文学碑にて



今回の文学散歩では、井伏鱒二ゆかりの方々に大変お世話になりました。そして多くの参加者の皆様より感謝の声をいただいています。次回も満足いただける文学散歩を企画していきますので、よろしく願います。

(学芸課/門田貴美子)

館長室から

「文学館中庭」

溝淵 良一

正面玄関を入ると目の前に中庭が圧倒するように広がる。北壁面をおおうツタと左右の白壁は土佐の風土を表現したものか。屏風のようにそそり立つ四国山地と漆喰土蔵の家並み、そして植栽は土佐湾。文学塚はさしずめ太平洋の果てのモアイ像なのか…などと勝手な思いを巡らせていますが、皆さんはどんなイメージをお持ちでしょうか。受付の職員によると、来館者の中にはこの眺めを結構気に入っておられる方が多くいるそうです。

ところで、土佐湾・太平洋にあたる植栽のハマヒサカキがどうもうまく育ちません。これまでも2度ほど植え替えをしています。一昨年あたりにはカタツムリの大量発生があり、昨年には中心部が枯れてしまいました。植物のことはよくわかりませんが、どうも環境が良くないようです。浅いコンクリートの上に盛られた土、水分補給、風通し、気温、日照など、素人考えながらどれをとっても悪条件ばかりとしか思えません。夏場の日照りは特に厳しいのではと思います。

枯れ始めてから昨年1年は様子を見ていましたが、植え替えの適期のこの4月に3度目の植え替えをしました。新しい苗はどれも葉が大きく光沢があり生き生きとしています。それに引きかえ長年厳しさに耐えて生き残った木々は弱々しさが際立ちます。また枯れはしないかと心配の毎日です。保水のため落ち葉を敷き、朝夕水やりにいそしんでいます。今度こそ3度目の正直で定着してもらいたいと毎日眺めています。中庭にはこのほかハトの侵入とツタのはびこりというやっかいな問題もあります。眺めて気持ちよい空間も文学館の大事なセールスポイントであり、手を抜かずに入入れを心がけています。



▲おはなしキャラバンの様子
拍子木の音で紙芝居のはじまりです。

子どもたちに気軽に楽しく文学に触れてもらおうと毎月第一土曜日に「おはなしキャラバン」を開催し、土佐民話を中心に紙芝居や絵本の読みかせなどを行っています。また、県内各地の幼稚園・学校等でも出前公演を行い、地域の民話に触れる機会としてご利用いただいています。

毎月第二土曜日には「語りと紙芝居の会」を行い、会長の市原麟一郎先生とともに紙芝居や民話の語りを勉強しています。



▲「朗読の会」の様子／熱心に耳をかたむける来場者のみなさん。

ますます多彩
になりました!!

文学館の取り組み

文学館では、県民の皆様楽しく気軽に文学に親しんでいただけるよう、様々な取り組みを行っています。
今回は当館の教育普及事業の中からいくつかご紹介いたします。

●土佐の民話に触れる

●文学作品を朗読で楽しむ

●土佐の文学を究める

朗読を通して文学に親しんでもらおうと「朗読の会」や「朗読フェスティバル」、全国でも例をみない「児童生徒文学作品朗読コンクール」など幅広い事業を行っています。毎月第三土曜日に開催している「朗読の会」では、県出身作家や展覧会関連の作品などの朗読を行い、様々な文学作品を耳で楽しむことのできる場として好評を得ています。

当館の顕彰作家や作品について学べる講座を、毎月第四土曜日に開催しています。上半期の「文学カレッジ」は文学の導入編とし、広く県民の皆様親しみを持っていただけの講座内容になっています。下半期の「文学専門講座」は、文学について深く掘り下げられるようなテーマを設定した連続講座となっています。

その他にも様々な講演会や講座などを開催し、より深くそして楽しく文学に触れていただけるような事業を行っています。

文学館では、誰でも気軽に文学体験ができます！
興味がある事業はお気軽にお問い合わせください！

(学芸課／森香奈子・島田美和)



みんなあつまれ！
高知県立文学館
おはなしキャラバン
毎月第1土曜日開催中！

文学館では、「こどものぶんがく室」で、毎月第1土曜日に、楽しいおはなし会を開催しています!! 土佐の民話を中心にした紙芝居・読み聞かせ・クイズなどで、楽しい時間を過ごしませんか？

学校への出前公演なども受付中です!!

場所：文学館 1階 こどものぶんがく室
時間：午後2時～(30分ていど)
入場：無料

やまもも自作朗読会
出演者募集中!!

開催日 9月20日(土)
場所 高知県立文学館ホール

これまでにご自身の詩が高知県こども詩集『やまもも』に掲載されたという方、やまもも自作朗読会に出演してみませんか？

募集〆切：7月11日(金)
詳しくは文学館までお問い合わせください。

※やまももについての詳細は7ページ目をご覧ください※

第11回 児童生徒文学作品朗読コンクール

◆地区審査(公開) 県内3会場

- 〈安芸会場〉安芸市民会館
・8月19日(火)午前10時～
- 〈大方会場〉大方あかつき館
・8月22日(金)午前10時30分～
- 〈高知会場〉文学館ホール
・8月25日(月)午前9時～

◆県審査(公開)
文学館ホール
11月16日(日)
午後1時～

表彰式記念講演会があります。

瀬戸内寂聴展

人と文学の軌跡を辿る「のみどころ」

今回の「瀬戸内寂聴展」では、交友のあつた文筆家、三島由紀夫、吉行淳之介、円地文子、大庭みな子、田宮虎彦、大原富枝といった方々の作品感想の書簡、特に前期の代表作に対する作家の書簡とともに瀬戸内寂聴さんの原稿や著作本などを展示しています。

例えば、瀬戸内さんの初期の作品一九五五(昭和五〇)年に出された『白い手袋の記憶』の中のデビュー作「痛い靴」を読んだ三島由紀夫の書簡には「久々のお手紙なつかしく愉快に拝見しました。貴女のお手紙はウィットに富み、一読、時を移るのを忘れます。(中略)僕は、女流作家に本質的に欠けてゐるのは、ユーモアとウィットだと信じ込んでゐますので、貴女が僕のその確信を破つて下さらなければならなかつた筈です。(中略)もっと客観的な飛躍した面白さがほしい。貴女ならきつと面白く書けると思ふのです。次作にうんと期待します。」と書かれています。率直な作品批評とともに励ましを忘れない、三島由紀夫のあたたかい人間性が窺える貴重な書簡となっています。このほか



にも、『夏の終り』『かの子撩乱』『死せる湖』『遠い声』。作品に対して多くの作家の感想、批評が寄せられています。

やがて、「痛い靴」に対する三島由紀夫の指摘を払拭するかのように、瀬戸内さんは、心に秘めた情熱と魂の叫びに従い、ひたすら小説を書き続け、今日、多くの人びとの支持を得られることとなりま

す。今回は、その瀬戸内さんの人と文学軌跡をご紹介します。



▲三島由紀夫書簡/徳島県立文学書道館提供

資料受贈報告

—最近の寄贈資料から—

『子どもに語る戦争たいけん物語 第5集
いのちきらめく河』

市原麟一郎著 リーブル出版
二〇〇八年一月 B6版 二二二頁



受贈報告(平成二〇年二月/四月) 敬称略

▼鍋島高明・相場師と土佐 鍋島高明著 米穀新聞社
▼森下昭幸・(父母に捧げる回想の八十年)乾坤一劇場落ちこぼれ人生記 森下昭幸(照堂)著刊他
▼小松もとみ・(歌集)呼びくるる声 小松もとみ著 高知アララギ短歌会
▼高知福祉専門学校・(えがお高知福祉専門学校創作童話集 No.18 高知福祉専門学校編刊)▼高橋正二(復刻版)長宗我部信親(叙事詩) 森林太郎(隴外)著 土佐史談会他
▼川村友二・(追剥の話) 井伏鱒二著 昭森社
▼市原麟一郎・(子どもに語る戦争たいけん物語第5集)いのちきらめく河 市原麟一郎著 リーブル出版他
▼日外アソシエーツ・(人物書誌大系38 倉橋由美子 田中絵美利・川島みどり編 日外アソシエーツ社)▼谷村晃甫・(花紀行 谷村晃甫の旅 谷村晃甫著・アシエツト婦人画報社編 アシエツト婦人画報社)

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

のために活躍されています。

著者の市原麟一郎さんは、一九二二年須崎生まれ。県立高校教諭として教鞭をとる傍ら高知県の民話の採話と記録につとめてきました。「土佐民話の会」を主宰し、一九七一年八月から月刊誌『土佐の民話』を発行。その傍ら民話子どもたちに語り継ぐため、手作り紙芝居をもつて県内各地の保育園・幼稚園・小学校、図書館などを巡回し公演をおこなってきました。また小学生や一般の方を対象に紙芝居講座を開き、紙芝居の作り方・演じ方の講師もつとめています。一九八七年には長年にわたる民話の発掘と伝承の仕事を通じて高知県の文化発展に寄与した功績により「高知県文化賞」を受賞されました。二〇〇一年に発足した高知県立文学館の「紙芝居研究会」(二〇二年より「語りと紙芝居の会」)では会長として紙芝居の作り方・演じ方など後進の指導育成

『いのちきらめく河』は「子どもに語る戦争たいけん物語」(いのちシリーズ)の第5集として刊行されました。二〇〇五年第1集として『いのちかがやく旅』が刊行され同年第2集『いのち羽ばたく空』二〇〇六年第3集『いのち燃えたつ山』二〇〇七年第4集『いのちよみがえる海』と順次刊行されてきました。「戦争民話」と位置づけるこれらの読み物は、何れも実話に基づいて作られています。市原さんは、あながき「戦争体験を語り継ぐ」の中で「敗戦を迎えたあの日から、いつか六十年の歳月がすぎた。…いつの間にか、戦争体験は風化してゆく。だから今こそ、戦争体験を語りついで、人が人として生きる権利を守つてゆこう。命の重さを改めて考えてみよう」とシリーズ刊行を思い立ったわけを述べています。

(学芸課/島村長生)

桂浜の酒供養碑 — 大町桂月と田中貢太郎 —

猪野 睦

仲秋の名月に桂浜が酒供養でにぎわったのは、戦後どれほどの年月だったろう。高知市からバスで、巡航船で、タクシーで、いや当時はハイヤーと言っていたが、多くの文化関係者が押しかけた。むろん今のように交通事情はよくなかった。大町桂月と田中貢太郎をダシに記念碑の前で名月をめで、酒に酔い、交遊を深めていく祭りだった。

大町桂月は明治二年高知市に生まれ、少年時に上京、やがて一高、東大へ入る。在学中に「帝国文学」を創刊、評論をかき、卒業後は「黄菊白菊」で美文の創始者として、全国に多くのファンを持った。博文館に入り「太陽」ほかの雑誌で評論家として名を高めた。だが酒に飲まれるようになり全国を旅し、紀行文家となっていくが、青森県十和田湖の駕旅館で大正一二年に没した。五六

▲「桃葉先生之碑」(右)と「桂月先生記念碑」(左)



歳だった。この大町桂月を偲んで桂浜に「桂月生記念碑」が建ったのは昭和三年仲秋の日だった。高さ二メートル、幅一メートルの碑に酒をあびせかけて始まるのが、酒仙にふさわしい名月の酒供養である。

田中貢太郎は桂浜対岸の桃の花が咲いていた仁井田に明治三年に生まれた。そこからとって桃葉と号したが、その「桃葉先生之碑」も桂月碑に負けない大きさを桂浜の松林に建っている。貢太郎は明治三八年、大町桂月をたよって上京、郷土の先輩、幸徳秋水、奥宮健之、田岡嶺雲らと

ころへ出入した。大逆事件周辺を見てきた貢太郎は、のちにこの三人のことをかき注目された。やがて新聞連載小説「旋風時代」をかいて当った。井伏鱒二、尾崎一雄、榊山潤、浜本浩、田岡典夫ら

が「博浪沙」をだすなかで育っていく。家の玄関には高知から送られてくる「瀧風」の四寸樽が置かれているほどの酒仙だった。博浪沙一族をひきつれてよく高知に遊んだが、昭和五年、安芸に遊んだ

とき血を吐き、翌年「なんちやあじや」なかつたきにのう」という言葉を残して郷里仁井田で没した。「桃葉先生之碑」が建ったのは昭和一八年七月だった。題字は村松梢風がかき、裏面の「博浪沙」

同人による紹介文のなかに、「先生性磊落脱俗、酒ヲ愛スルコト命ノ如シ、人或ハ酒仙ト呼ブ」という言葉が見える。それにしても太平洋戦争の総動員令下、こんな「桃葉先生之碑」が建つというのにも高知らしい。

(詩人)

こどもはうたう

～『やまもも』30年の歩み～

平成20年9月13日(土)～11月3日(月)

場所：2階企画展示室

観覧料：350円(常設展含)

文学館では高知県に深く根をおろした児童文学である『やまもも』の30年あまりにおよぶ歩みを、この秋にご紹介します。



高知県こども詩集 やまもも 30年

うたいつづけて

時代とともにかがやく 土佐の子の詩 81編

展覧会紹介

人事異動

新所属 旧所属

【転出】文化・国際課主任 川島 郁子

高知県文化財団 総務部主幹 (文学館主幹) 三宅 亜紀

【転入】文学館事業課長 (地産地消課主任) 黒石 由美

1977(昭和52)年から発行され続けている高知県こども詩集『やまもも』は、子どもたちが、自然の不思議さや家族や友だちとのかかわりなど、日常生活の中でさまざまに見たことを詩で表現したものです。素朴でみずみずしい感性でつづられた作品を、時代背景とともにパネル等で展示します。『やまもも』の作品には、見る人を子どもの頃に引き戻すような、純粋な魅力があります。『やまもも』の世界を堪能できる展覧会にご期待ください。

(学芸課/間城彩佳)

企画展
案内

瀬戸内寂聴展～人と文学の軌跡を辿る～

平成20年 6月7日(土)～7月6日(日)まで 午前9時～午後5時
(入館は午後4時半まで)

◆会場/高知県立文学館 2F企画展示室 ◆観覧料/一般350円(常設展含む)

「夏の終り」から最新作「秘花」までの代表作の紹介や親交のあった作家や批評家の書簡を展示し、瀬戸内寂聴さんの人と文学の軌跡を辿ります。(※会期中 休館日なし)



瀬戸内寂聴さん(徳島県立文学館提供)

ムーミンの世界展～ヤンソンさんからの贈り物～

平成20年7月19日(土)～8月31日(日)

場所：高知県立文学館2F企画展示室

観覧料：600円(常設展含)

フィンランドの女性作家トーベ・ヤンソンの「ムーミン」シリーズは、1945年の誕生以来、世界各国で愛されています。本展では、「ムーミンの世界」の素晴らしさをパネル展示とジオラマなどの立体的資料を交えて楽しくご紹介します。

ムーミンクイズやポップアップカード作りなど、夏休みに親子で楽しめる多彩な関連イベントを予定しています！詳細は2・3ページをご覧ください。



© Moomin Characters™

高知県芸術祭

文芸賞作品募集！

平成20年度高知県芸術祭では、

「第37回文芸賞」の作品を募集します。

【公募作品部門】

・短編小説 一人一編400字詰原稿用紙で10枚以内

・詩 一人一編400字詰原稿用紙で2枚以内

・短歌 一人3首以内

・俳句 一人5句以内

・川柳 一人5句以内

【選賞】

・各部門ごとに優秀作品に賞状と副賞

【募集期間】

平成20年8月1日～

平成20年9月30日(当日消印有効)

【注意事項】

・作品は未発表のもの

・応募者は高知県在住者

・全部門とも自由題

・文字は楷書で読みやすく表記

・短歌、俳句、川柳は官製ハガキで応募

・原稿用紙の場合は、1面に1文字を記入

・氏名(ペンネームがあれば併記)、現住所、

電話番号、年齢、性別を明記

・応募作品は返却しません

・ご記入いただく個人情報、運営上の管理及び

本人への連絡の用途に限り、利用いたします。

ただし、入選作品については、在住市町村名及び

お名前を公表します。

応募

問い合わせ先

〒781-8123

高知県立文学館
(財)高知県文化財団内
高知県芸術祭文芸賞係

あて

TEL 088-866-8013

利用案内

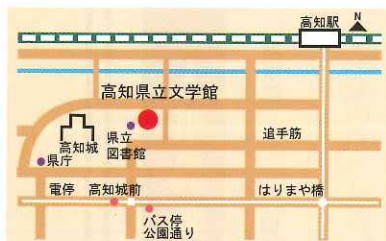
開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
観覧料 一般350円

特別企画展のあるときは、料金が変わります。20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。ただし、近辺に有料駐車場があります。

駐車場 附属設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857